

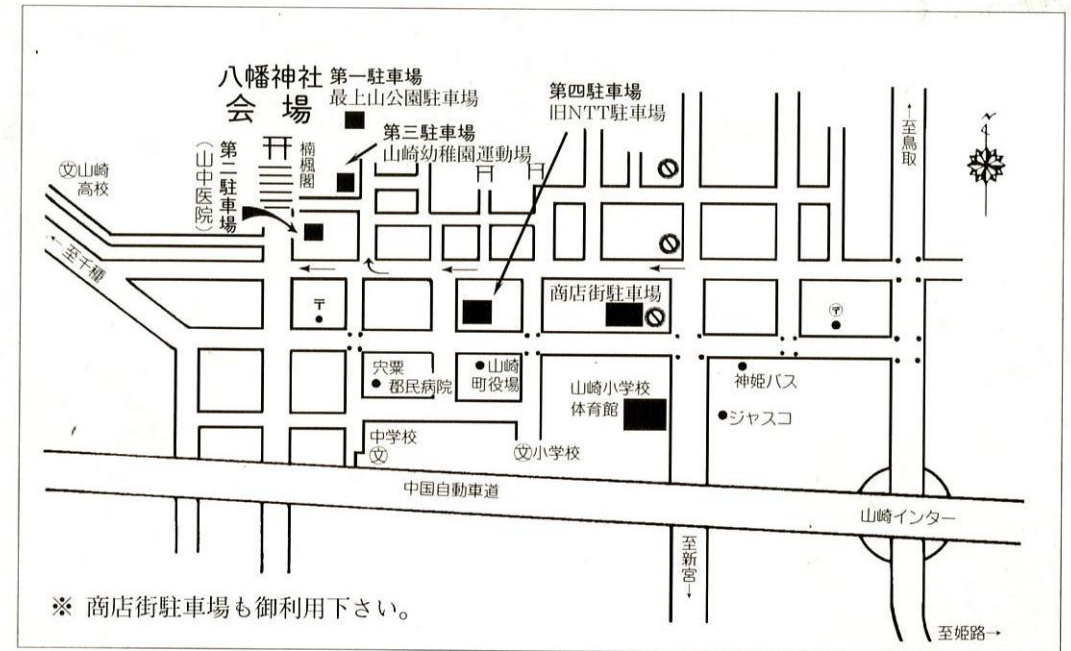
第十二回

薪能



八幡神社奉納

《会場略図》



と き 平成13年9月1日(土)(小雨決行)
 と ころ 宍粟郡山崎町八幡神社境内
 (台風等の不測の場合山崎小学校体育館に変更)
 第 一 部 宍粟郡謡曲同好会 午後2時始
 第 二 部 薪能奉納 午後6時始
 主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会
 後 援 山崎町文化協会・山崎町教育委員会・神戸新聞社・山崎町商工会
 龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ
 宍粟郡医師会有志・宍粟郡歯科医師会有志
 協 賛 宍粟郡謡曲同好会 <入場無料>

事務局

山崎町西町(山中医院内)

山崎八幡神社薪能奉賛会

TEL (0790) 62-0036

◆ 山崎八幡神社奉納薪能次第 ◆

“第十二回薪能開催に当り”

残暑いまだ厳しい折ですが、皆様方には益々ご健勝にてお過しのこと慶賀に存じます。

扱、私等が奉賛して参りました薪能を九月一日に実施させていただきますことにいたしました。

本年も観世流の諸先生に“巻絹” “俊寛” を演じていただき狂言では大蔵流の“寝音曲” を演じていただくことになっていきます。

どの演目も永い伝統と深い芸術性に磨かれたものばかりですので、定めし皆様方に深い感銘を与え皆様方をしばし幽玄の世界に導くことと思えます。是非当日は御来場下さいまして心ゆくまで御鑑賞下さいますようお願い申し上げます。



薪能奉賛会会長

壺 阪 壽

第一部 穴栗郡謡曲同好会番組

(午后二時始)

■連 吟・秋田泉謡会

鐵輪
後シテヨリ

丸山 央	小瀬七五三男
蒲田 哲子	大谷 正之
中村 清子	中坪 義治
福井 豊子	進藤 千秋
秋田三恵子	篠原 宗平
中山 昌子	

■連 吟・波賀翠謡会

井筒

松本 繁信	大成みちよ
藤原 幹三	江崎金治郎
	岡田 薫

■仕 舞・山崎篠謡会

賀 茂	上田 隆雄	原 忠雄
殺生石	原 みち代	上田 隆雄
		伊野 輝代
		山崎きよ子
		宮本 弘子
		坂根文美子
		進藤ヒデ子
高 砂	原 忠雄	原 みちよ
		上田 博子

■連 吟・宇田唱謡会

放下僧	ツレ山国 友子	宇田 八代
	シテ福井 浩道	藤井 裕
	ワキ森 秀夫	長田 豊彦
		宇田 渡
		広本 清子
		西嶋 繁子
		藤井すみ子

■仕 舞・鶴崎観和会

賀 茂	田中 洋子	永峰三重子
花 月	永井由美子	谷口金市
葵 上	鶴崎 智子	竹添 齊
通小町	山國 重代	鶴崎 和美
		井上 晃夫
		前田 茂雄
		石原 和子

■素 謡・山崎集杉会

菊慈童	新間 勝代	吉川 宏美	岸本 通哉
	久保 和子	加藤 昭彦	
	玉田 敬子	塚田 清一	
	名賀美小夜	山中 陽一	
	三渡 啓介	山根 悠子	
		藤多 克己	
		小泉 綾子	
		三谷 恭三	
		安田 浩三	

■仕 舞・秋田泉謡会

嵐 山	進藤 千秋	福井 豊子
敦 盛	篠原 宗平	中村 清子
		大谷 正之
		中坪 義治
		小瀬七五三男
		蒲田 哲子

■連 吟・池田掬水会

天 鼓	シテ大畑 清	久宗 丑雄
	ワキ石野 敏郎	大部 満男
		伊野 操治
		安田 武嘉
		柳田 薫
		平田 勇治
		春名 一利

第二部

午后六時始 小雨決行

修 被 山崎八幡神社宮司 根岸雅晴
能奉行舞台改め 薪能奉賛会副会長 山中陽一

觀世流 能樂

笠田昭雄 上田貴弘

卷

絹

和田英基

辻 雅之 荒木健作

神樂留

間 茂山千五郎

上田 悟 野口 亮

後見 大西礼久 木内十三比古

地謡 鶴崎和美 藤谷音彌

田中章文 山田義高 笠田 稔 杉浦豊彦

火入式

挨拶 新能奉賛会会長 壺阪 壽
祝辞 兵庫県議會議員 長田 執
祝辞 山崎町長 白谷敏明

大蔵流

狂言

寢音曲

茂山千作

茂山千五郎

後見 茂山正邦

觀世流

仕舞

天鼓

杉浦豊彦

地謡 藤谷音彌 木内十三比古 上田大介

觀世流

能樂

康頼 武富康之 成経 上田拓司

大槻文蔵

俊寛

江崎金治郎

辻 芳昭 荒木賀光 野口 亮

間 茂山正邦

後見 笠田昭雄 赤松禎英

地謡 水田雄吾 藤谷音彌 斎藤信輔 山田義高 山口剛一郎 多久島利之 久保誠一郎 上田大介

閉会の辞

薪能奉賛会副会長

山中陽一

終了 午后八時半頃

お祝いのことば



山崎町長 白谷敏明

庭にすだく虫の声も夜ごとにしげく、黄金色の稲穂が風に揺れる実りの秋となりました。本日、山崎八幡神社奉賛新能が厳肅かつ盛大に開催されますこと、心よりお祝いを申し上げます。

昭和五十五年に始められて以来二十一年、十二回を重ねられ、永い年月にわたる山崎八幡神社新能奉賛会の皆様を始め、関係の皆様方のご努力の積み重ねに対して、深く敬意を表します。

めまぐるしく変容する今日の社会において、人々の価値観も多種・多様化し、地域の連帯感も希薄化しており、今ほど「心の豊かさ」が求められているときはないと思います。

ここにご参集の皆様は、日頃より伝統芸能や文化を愛され、充実した人生をお過ごしのことと思います。さらに、文化活動を通して、多くの人々と出会い、交流を深められ、地域づくり・人づくりを実践されており、誠に意義深く、素晴らしいことであります。

今宵は、夜長月のひととき、幽玄の世界を楽しみ、何世代にもわたって磨かれてきた伝統芸能に、ともに感動をあげたいと思います。

山崎八幡神社奉賛新能が今後さらに隆盛発展されますことを祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

お祝いのことば



兵庫県議会議員 長田 執

暑かった夏も終わりとなり、秋を告げる虫の音も美しくさわやかな季節となりました。

本日は山崎八幡神社において、二十一世紀初頭を飾る第十二回奉賛新能が開催されますことを、心からお祝い申しあげます。

はるか元禄時代に建てられ多くの人達はその時代／＼に引き継ぎながら守り育ててこられたここ八幡神社の能舞台で、六百有余年の歴史と伝統に輝く「能」正に時を忘れ幽玄の世界に遊ばせてくれる「能」絢爛豪華で万人の心を引きつける「能」が奉納され続け、既に今回で十二回目を迎えるという。

二十年を越える長期に渡って、山崎町を中心に宍粟郡の皆さんが育ててこられた奉賛新能です。今日はたくさんの皆さんと一緒に、先生方の磨きぬかれた芸を心ゆくまで楽しませて頂きたいと思っております。

新能奉賛会の更なるご発展をお祈りしてお祝いいたします。

演目解説

観世流

能楽 卷

絹 (まきぎぬ)

【あらすじ】時の帝が不思議な夢を御覧になり、千足の巻絹を諸国から集めて、熊野三社に奉納するよりの宣旨が下ります。そして勅使が熊野にあって、国々から巻絹の集まってくるのを取りまわっています。ところが、都からの分だけが未だに到着しません。都からの使者は、はじめての紀伊国(和歌山県)下りであり、また大切な勅命でもあるので、緊張して旅を急いだのですが、熊野に着いて、まず音無天神に参詣し、折からの冬梅の見事さに一首の歌を詠み、神に手向け、その後、勅使の前へ出ます。勅使は、使者の遅参の罪を責めて縛らせます。すると、一人の女が現れ、「その者は昨日音無天神に詣で、和歌を手向けた者であり、神も納受されたのだから、戒めの縄をとくように」といいます。彼女は音無天神の神霊が憑り移った巫女ですが、勅使は、賤しい身で歌など詠める筈はないかと、神慮を疑います。そこで巫女は、その者に上の句を詠ませ、自分が下の句を続けて出来た——「音無にかつ咲きそむる梅の花」

「句はざりせば誰か知るべき」という一首を証拠に縄をとかせます。そして和歌の徳、経の威力を説きます。ついでに勅使の求めに応じて祝詞をあげ、神楽を舞ううち神がかりの態になり、熊野権現の神徳を語りますが、やがて神は去り、巫女は狂いから覚めます。

【みどころ】和歌の徳を賛えるのが主題ですが、作品としては、神楽を舞い、神がかりの様を演じるのがねらいです。普通の神楽物は、二段形式で、後場に女神自身が現れて舞うのですが、神がかりの巫女が舞うのが本曲の特色ですから、シテはもちろんのこと、ツレも大事な役ですし、狂言も活躍します。こうした点にも、古作のおもむきが、うかがわれます。

ツレは天神の前では、心の中で歌を手向けた態でそれを謡わず、巫女と一緒に勅使に披露するまでは、観客に伏せておきます。アイが「ガツキメ/やるまいぞ」と掛けた縄を、後にシテがといて「とくとくゆるし給へや」とワキへ投げるといった動作など、劇的な構成・演出が考えられています。一曲のクライマックスは、やはり、神楽からイロエ、キリにかけての部分で、だんだんに物狂しさが高まってゆき、突如、神が上がって本性に戻る——そういった変り目に御注目下さい。

【備考】男性の場合は、水衣の上から腰帯をしめますが、女性の役で、水衣の上に腰帯をしめるのはこの役に限ります。

巻絹とは、軸に巻いた絹の反物で、献上物として特に高級品がえられました。

大蔵流

狂言

寝音曲 (ねおんぎょく)

太郎冠者とは太郎冠者と呼ばれる奉公人をシテとした狂言である。奉公人がそれと気づかないように主人をうまくかわしたり嘲笑したりするさまは、現代人にとって人ごとではなく狂言の中では最も身近に思える出し物であろう。『寝音曲』は、主人に対してごまかそうとした太郎冠者がかえって難儀するさまがおかしみとなっている。主人に謡を所望された太郎冠者は、この先いつでも謡わされてはかなわないと考え、いろいろと理由をつけて逃げようとする。酒が入らないと謡えない、女房の膝枕でないといい声が出ないなどと言って断るが、それならばとばかりに主人が酒を出したり、自分の膝枕を貸したりまでする。酒を飲み、ゆつたりと主人の膝枕ですっかり

いい気になって太郎冠者は謡いだす。主人がそつと起こすとかれ声を出し、また膝枕におろすといい声で謡うなどしているうちに、ついいつか間違いで逆になってしまふところが笑いの山場。



観世流

能楽

俊寛 (しゅんかん)

孤島にとり残される者の絶望の境地を描くことによつて成りたつている曲である。『平家物語』巻二「康頼祝の事そとは卒都婆流そとはしの事」を素材にしたもので、作者は不明である。

中宮御安産の御祈りのために大赦が下り、九州薩摩瀉の鬼界ヶ島に流されていた罪人が許されることとなる。島で俊寛が康頼、成経らとともに水桶の水を酒と思つてわびしい酒盛りをしていると、赦免使が到着する。そして康頼、成経ら二人の赦免を言い渡すが、俊寛の名はない。俊寛は赦免使に確かめたうえで自ら礼紙れしを手にとつて読むが、やはり自分の名は書かれていない。落胆の底に沈む俊寛を一人残して船は遠ざかっていく。

康頼、成経らが島の熊野神社に赦免を願つて参詣するのを笑つていた強気の俊寛が、赦免の場で一転して心が弱り果てるという内面の変化が見どころである。



八幡神社奉納新能の記録

回数	年月日	演目
1	昭和55・10・4	観世流 羽衣 上田照也 江崎金治郎
2	56・10・24	観世流 鉢木 上田照也 江崎金治郎
3	58・10・1	観世流 三井寺 浦田保利 江崎正左衛門
4	60・10・5	観世流 弱法師 杉浦元三郎 江崎正左衛門
5	62・9・26	観世流 翁 面箱松本薫 観世元正 三番叟 茂山千五郎 千才 観世清和
6	平成1・9・16	観世流 菊慈童 吉井順一 江崎金治郎
7	3・9・21	観世流 経正 大西智久 指吸雅之助
8	5・9・11	観世流 鶴亀 井上嘉久 指吸雅之助
9	7・9・2	観世流 吉野天人 坂口信男 江崎金治郎
10	9・9・6	観世流 安宅 大西智久 江崎金治郎
11	11・9・4	観世流 高砂 杉浦豊彦 江崎敬三
12		観世流 萩大名 茂山千作 松本薫
13		観世流 素袍落 茂山千作 茂山千五郎
14		観世流 蝸牛 善竹忠重 阿草一徳
15		観世流 口真似 丸石やすし 木村正雄
16		観世流 瓜盗人 茂山正義 綱谷正美
17		観世流 呼声 茂山千之丞 丸石やすし
18		観世流 二人袴 茂山千三郎 松本千五郎 木村正雄
19		観世流 昆布売 伊藤忠三郎 茂
20		観世流 水掛罨 茂山あきら 茂山千五郎
21		観世流 瓜盗人 茂山正義 茂山あきら
22		観世流 柿山伏 茂山千五郎 茂山正義
23		観世流 土蜘蛛 杉浦元三郎 江崎康雄
24		観世流 紅葉狩 杉浦元三郎 江崎康雄
25		観世流 小鍛冶 大西智久 江崎金治郎
26		観世流 葵上 大西智久 江崎金治郎
27		観世流 狸々乱 大西智久 藤井徳三 江崎金治郎
28		観世流 石橋 上田拓司 藤井徳三 中村彌三郎
29		観世流 安達原 藤井徳三 江崎金治郎
30		観世流 土蜘蛛 藤井徳三 江崎金治郎
31		観世流 野守 波多野晋 中村彌三郎
32		観世流 岩船 上田貴弘 江崎敬三
33		観世流 井筒 大槻文蔵 江崎金治郎

演者紹介

8	9	10	11
観世流 鶴亀 井上嘉久 指吸雅之助	観世流 吉野天人 坂口信男 江崎金治郎	観世流 安宅 大西智久 江崎金治郎	観世流 高砂 杉浦豊彦 江崎敬三
狂言 口真似 丸石やすし 木村正雄	狂言 蝸牛 善竹忠重 阿草一徳	狂言 素袍落 茂山千作 茂山千五郎	狂言 萩大名 茂山千作 松本薫
観世流 土蜘蛛 藤井徳三 江崎金治郎	観世流 野守 波多野晋 中村彌三郎	観世流 岩船 上田貴弘 江崎敬三	観世流 井筒 大槻文蔵 江崎金治郎

観世流 二十五世直弟 神戸在

能楽協会神戸支部副支部長

上田貴弘 杉浦豊彦 観世流 二十五世直弟 京都在

茂山千作 重要無形文化財(個人)保持者 京都在

大槻文蔵 能楽協会大阪支部支部長 大阪在

祝

薪

能

ご協賛者ご芳名

宍粟郡町村会様	嘉之海齒科様
山崎町商工会様	金井信治様
山崎町文化協会様	内山正作様
山崎きよ子様	龍野ロータリークラブ様
宇田渡様	山崎ライオンズクラブ様
伊野操治様	江崎福王会様
樽岡敬祐様	姫路薪能奉賛会様
中川治衛門様	龍野龍諷会様
栗山章様	新宮福王会様

※八幡神社奉納の第十二回薪能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできませず、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることもありま

す。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。